

《論 文》

移住とライフコース：  
動機を語ることを通じたライフコースの構築

木 戸 功

要 旨

この論文では地方への移住を経験した人々のライフコースを構築主義の立場から検討する。インタビューを通じて得られた語りを移住動機に着目して分析する。インタビューという相互行為場面において、かれらの移住をめぐる語りはいくつかの文脈を参照することによって文字通り動機として提示されていることを論じる。「職業キャリア」「個人時間」「歴史時間」「家族キャリア」という4つの文脈に着目することで、動機を語るという実践が、それを通じてかれらのライフコースを言説的に構築する実践でもあることを例証する。さらに移住後のライフコースをめぐる予備的考察として、かれらの経験が地域の人々によって共有されている「ローカルな文化」を参照しながら語られていることを示す。

キーワード：ライフコース、動機、構築主義

1 はじめに

北海道の中山間地域Zにおいては、首都圏をはじめとした外部からの移住者に対して、地域産品である木工品製作の技術を指導し生産者として育成する研修制度が存在する。1984年から始まったこの研修制度は、2016年までに53名の研修生を受け入れてきた。そのうち12名はZ出身者であるが（そのうち2名はUターン）、残る41名はZ以外の地域からの移住者であり、なかでも24名は北海道外からの移住者である（関東14名、関西3名、中部2名、九州2名、北陸1名、中国1名、東北1名）。現在、Zにおいては20名の生産者が自らの工房を構え生産に従事しており、そのうち13名はこの研修を経て独立した移住生産者である。

筆者は、大きな転機となったと思われるZへの移住という出来事が組み込まれたかれらのライフコース形成のあり方を把握することを主たる目的として、インタビュー調査を含むエスノグラフィックなフィールドワークを実施してきた。

この論文では、まずZの概況を簡単に述べたうえで、そこでの木工品の地域産品化のとりくみと、そうしたとりくみのなかから要請され開始されるにいたった生産者育成のための研修制度の

変遷について整理する(第2節)。つづいて、本研究の理論的な立場を明らかにしたうえで、本論文の目的と調査の対象および方法について述べる(第3節)。そのうえで、13名の移住生産者の全体像を示すとともに、かれらが語る移住動機の中から典型的とみなしうる「動機の語彙」を示す(第4節)。さらに、インタビューという相互行為場面において生みだされる語りを、文字通り動機として成立させているテーマを析出することで、動機を語るという実践がそれを通じてかれらのライフコースを構築する実践でもあることを例証する(第5節)。これらをふまえた上で、本研究の今後の課題を検討する(第6節)。

## 2 木工品の地域産品化と生産者の育成

### 2-1 Zの概況

Zは北海道東部の中山間地域に位置する自治体である。「住民基本台帳」にもとづく2016年時点での人口は約3,000人、高齢化率は約40%である。もともと林業と農業を基幹産業とし、とりわけ林業のまちとして栄えた。ピーク時の1950年代には人口は12,000人を超えたが、それ以降は林業および林産業の衰退とともに緩やかに減少し、近年では人口減少と高齢化率の上昇が進む。「国勢調査」によると、1980年と2010年時点の産業別就業者の構成比は第1次産業がそれぞれ40%弱から約30%へ、第2次産業が30%弱から約10%へ、第3次産業が約35%から約60%へと推移している。転入者に比べて転出者が多く、なかでも20歳前後の若者による進学や就職に際した転出が多く、また1980年代以降は人口の自然減もつづき現在にいたる。「まち・ひと・しごと創生法」にもとづいて2016年に示されたZの「総合戦略」においては、人口流出の抑制と転入(移住)の促進に加えて、基幹産業を中心とした新たな雇用の創出と経済の活性化が課題のひとつとしてあげられている。

### 2-2 木工品の地域産品化のとりくみ

Zにおける地域産品としての木工のとりくみは1983年に開始される。そのひとつのきっかけはある工業デザイナーの提案であったとされる。すでに自主的な活動を始めていた地元の木工サークルのメンバーを中心として、地域にある木材資源を活用した新たな産業の開発がとりくまれていくのであるが、その担い手は生業をもつ者たちであり、Zの木工品生産はいわば副業としてはじまったものである。製品の中心は椀や皿等の食器である。首都圏をはじめとした地域の外での展示会などで高く評価されるとともに、Zの地元広報誌などでも紹介され、Zの木工品はやがて当時の北海道がすすめる「一村一品運動」の代表的なとりくみのひとつとしてみなされていく。また、その後のZの学校給食器としての採用などによって、文字通り地域ブランドとしての位置づけが与えられていく。

生産者が構える工房数の推移をみてみると、開始当初の2工房から3年後の1986年には10工

房と増加し、その後も数を増やし1995年には18工房となる。1990年代の後半にやや落ち込むが、2000年代に入ってからは、おおむね20から23工房で推移している。次項で詳しくとりあげるように、1984年から生産者育成のための研修制度がZによる公的な事業として開始される。この研修は副業としてではなく、木工を生業とする生産者を育成することを目指したものであるが、まず1985年に、つづいて1987年および1988年にそれぞれ1工房ずつが研修を経た者によって開設される。その後1994年以降に開設される工房はすべてが研修制度を利用した者、つまり生業としての生産者によるものとなる。

ただし、工房の維持つまり生産の持続にはさまざまな課題があったことが推察される<sup>(1)</sup>。現在Zの木工を所管している「木工センター」（仮称）から提供された資料にもとづいて筆者が数えたところ、開設後10年未満で廃業した工房は16工房あり、そのうち研修を受けずに地元の人びとが開設した工房が5工房、また研修後に開設された工房が11工房である。後者の11工房のうち、2001年までに開設された工房は10工房あり、残る1工房は2006年に開設されたものである。同じくこの11工房のうち、地元出身者によるものは3工房あり、外部からの移住者によるものが8工房である。

すでに述べたように現在、それぞれ一人の生産者によって20工房が稼働しており、そのうち13工房が移住生産者によるものである。生産者の平均年齢が50歳を越えかれらの高齢化も進む現在、Zにおいては今後5年間に生産者を新たに13名増やすことが目標とされている。

### 2-3 研修制度の変遷

とりわけ1990年代以降Zにおける生産者の育成は、木工による新たな地域産品を用いた産業振興のための手段であると同時に、研修生を外部からも募ることで、Zへの移住とその後の定住を促進させることを目的としたとりくみのひとつとしても位置づけられることになる。すなわち、進行する人口減少に対する施策という意味ももつ。現在稼働している20工房のうちUターン者を含めた地元出身者によるものが7工房あり、そのうちの4工房は研修制度を経た生産者によるものである。すでに述べたように、残る13工房はZにゆかりがあったわけではない者がそこに移り住み、移住生産者として営むものである。この移住生産者のうち3名は北海道内の他地域から、残る10名は北海道外からの移住者であるが、東京を含む関東地方が7名と最も多く、それ以外には東北、中部、関西の各地方からの移住者が1名ずついる。

1984年に開始された研修制度は、現在までに数回の休止期間をはさみながら、その都度制度を変更させながら現在にいたる。2016年までに研修生として受け入れられた者は53名おり、そこには6名の女性が含まれる。ここでは1984年から1998年までの期間を第1期、2000年から2005年までの期間を第2期、そして2011年および2012年を第3期、さらに2015年からは第4期と区分し、それぞれの研修制度の特徴を整理していく。

第1期（1984年～1998年）の研修制度においては37名の研修生が受け入れられる。当初はす

べてがZの地元の者であったが、1986年より北海道内の他地域にも開放され、同年から比較的近郊の地域から研修生が受け入れられる。1990年までの17名の研修生のうち、他地域からの移住者は6名である<sup>(2)</sup>。またこの17名の研修開始時の年齢の平均は25.5歳（最年少15歳、最年長60歳）であるがばらつきがあり、10代が9名ともっとも多く、次いで20代が4名、30代が2名、40代と60歳の者が1名ずつとなっている。

その後1992年より北海道外からの研修生の受け入れが開始される。1992年から1998年の20名の研修生の研修開始時の年齢の平均は29.0歳で、20代が中心となり14名（最年少20歳）、次いで30代が4名、40代が2名（最年長45歳）である。またこの間の研修生はすべてがZ外の地域からの移住者となる。そのうち北海道内の他地域からの移住者は3名である。北海道外からの17名のうち、関東からの移住者が9名ともっとも多く、次いで関西と九州からが2名ずつ、その他東北、北陸、中部、中国からがそれぞれ1名である。その後、後述する第3期の2012年に地元出身者によるUターンのケースをのぞいて、Zの木工の研修生はすべてが外部からの移住者となる。

第1期における研修期間は1986年までは1年間、1987年から1996年までは3年間、1997年は2年間、そして1998年は1年間である。また1986年より研修生に対する経済的な援助が開始され、研修生は生活が保障された環境のもとで、木工の技術と知識を習得することが可能となる。Zの木工というとりくみのきっかけを与えた工業デザイナーの紹介で、北海道外から毎月通う「先生」を中心に数名のZの職員が指導する体制がとられる。研修終了後に一定期間指導員として後輩の育成に携わる者もいたという。また、1988年には木工製品の販売機能をもつ施設である「木工センター」（仮称）が完成し、販売スペースの奥に、研修用の工房が新たに設置される。さらにその後、1993年には研修後に数名が一定期間有料で利用できる賃貸の工房施設「共同工房」（仮称）がその近くに設置される。この第1期の37名の研修生のうち、研修後に「共同工房」を含めて工房を開設した者は20名（54.1%）であり、またそのうち10年以上生産を継続した者が10名である<sup>(3)</sup>。便宜的に工房開設後10年以上生産を継続した者を定住者とよぶことにすると、第1期研修生の「定住率」（定住者数/研修者数×100）は27.0%である。

第2期（2000年～2005年）の研修制度は1年間の受け入れ休止期間を経て開始され、9名の研修生が受け入れられる。そのすべてが外部からの移住者であり、そのうち北海道内からの移住者が2名、それ以外の者は、関東地方からが5名、中部および関西の各地方からがそれぞれ1名である。研修開始時の平均年齢は40.6歳となり、若年層を中心とした第1期と比べて高くなる。40代の者がもっとも多く5名、次いで30代が3名（最年少30歳）、残る1名は52歳の最年長者である。研修期間は2年間である。第2期においては、研修生の資格要件として30歳以上55歳以下という年齢制限が設けられる。また第1期と異なり研修期間中のZからの経済的援助がなくなるとともに、一定額の工房開設準備金のZへの預け入れが課されるようになる。研修生が研修中に生産した製品のZによる買い上げという仕組みがすでに第1期よりあり継続されていた

が、研修生は蓄え等により生活費をまかないながら研修を受けることになったのである。

こうした制度変更の背景には、第1期における工房開設者および定住者の少なさという問題を指摘することができる。この点を改善するために第2期においては、研修後の工房開設と定住への強い意志が研修生に求められるようになる。実際に9名の研修生すべてが研修後に工房開設にいたる。ほとんどの者は「共同工房」を経て独立した工房を構えるにいたる。そのうち2名は家庭の事情による廃業を止むなくしたとされるが、残る7名は現在まで生産を継続しており「定住率」は77.8%である。指導体制には大きな変更はなく、第1期同様に毎月通ってくる「先生」を中心とし、元研修生を含む指導員がそれをサポートするというものである。

第3期（2011年～2012年）は2006年からのやや長い休止期間を経て始まるが、研修生の受け入れは2年間で終了する。この間に3名の研修生が受け入れられ、いずれも北海道内の他地域からの移住者である。すでに触れたように、そのうち1名はZ出身者でありUターンによるものである。研修開始時の年齢はいずれも30代であり（平均33.7歳、最年少30歳、最年長36歳）、第2期に比べて若くなる。資格要件としての年齢制限に下限がなくなり、原則45歳以下となる。研修期間は第2期と同様に2年間で、研修期間中の経済的な援助については、1年目には提供されないものの2年目には提供されるように変更される。また第2期にあった工房開設準備金の預け入れも不要となる。研修中に生産した製品のZによる買い上げという仕組みには変更はなく継続される。3名の研修生のうち1名は、家庭の事情により修了することなく途中で辞退しているが、残る2名はいずれも研修後に「共同工房」を利用して工房を開設し、その後独立した工房を開設し現在にいたる。生産者となって10年にはまだ満たないが3名のうち2名（66.7%）が定住の意志をもって生産をつづけている。指導体制には大きな変更はないものの、中心的指導者である「先生」が高齢となり今後の指導のあり方を大きな検討課題としながら、2013年から再び休止期間に入る。

2013年にZの木工は30周年を迎える。これまでにも10周年（1993年）、20周年（2003年）にはそれぞれ記念イベントが企画されている。2013年の30周年に際してもイベントが開催されるとともに、今後のZの木工のありかたをめぐる検討委員会が組織され、資材確保や生産体制さらに流通販売などといったテーマに加えて、生産者の育成と新たな研修制度のあり方が議論される。そうした経過を経て第4期の研修制度が2015年から開始され現在にいたる。2015年には3名（いずれも30代）、2016年には2名（20代と40代）の研修生がいずれも北海道内の他地域から移住し現在研修中である。指導体制はZの地元出身の生産者3名を中心としたものに変更される。そのうち主任にあたる生産者は研修を経ずにZの木工のとりくみの初期の段階で工房を開設したベテラン生産者であり、残る2名は第1期の研修を経て生産者となった者たちである。

### 3 目的・方法・対象

#### 3-1 理論的・方法論的立場と目的

個人の人生や生き方を越えた「社会現象として出現し、把握できる人生パターン」(嶋崎 2008)としてのライフコースをめぐるには、すでに学際的な研究が蓄積されてきた。20世紀の中葉に確立した「ライフコース・パラダイム」の系譜を論じる中でジールとエルダーはライフコースを「個人が時間の経過の中で演じる社会的に定義された出来事や役割の配列(sequence)」(Giele and Elder 1998=2003:70)と述べるとともに、「時空間上の位置(文化的背景)」「結び合わされる人生(社会的統合)」「人間行為力(個人の目標志向性)」「人生のタイミング(戦略的適応)」という4つの要素が相互に作用することによってライフコースの軌道が形成されると述べる(Giele and Elder 1998=2003:49-52)。すなわち、個人の社会構造上の位置づけやその文化的背景、人間関係やネットワーク、そして個人の動機づけが、さまざまな出来事の経験を通じた役割の取得や喪失そして移行のタイミングを経由してライフコースのパターンが形成されるのである。

ライフコース研究においては量的研究に加えて質的研究も蓄積されてきたが、それらの研究においては、構造であれ歴史的な出来事であれ、個人にとって外在する要素を独立変数とみなし、従属変数としてのライフコースのパターンを説明するところに方法論的な特徴がある。これに対して本研究は、方法論的には異なる立場からの研究のあり方を示す。本論文では社会構築主義の立場から人々のライフコースのあり方を検討する。スペクターとキツセ以来の「社会問題の構築主義」(Spector and Kitsuse 1977=1990)にもとづく研究プログラムを「家族」や「自己」といった領域に展開したホルスタインとグブリアムは、「個人の経験に時間との関連で意味とパターンを与えるために、(中略)、誰もがやっている、状況づけられた解釈的活動の産物としてライフコースをとりあつかう」(Holstein and Gubrium 2000:7)と述べ、ライフコース研究における新たな視角を提案している。かれらの提案は、所与の社会的条件の下で、人々が利用可能な言説的資源を技巧的に用いてライフコースを意味づけていく、そうした過程に着目することをうながすものである。かれらのその後の「語りの現実(narrative reality)」(Gubrium and Holstein 2009)の分析という提案にも依拠しながら、本研究においては人々の語りを通じて構築されるライフコースのあり方を検討していく。

本論文でとりあつかう主なデータはインタビューを通して得られたものであるが、ここではインタビューという実践を対象者と調査者による相互行為とみなす(鶴田・小宮 2007)。分析を通じて、Zへの移住という出来事を経験してきた人々が語る動機に着目しながら、かれらが自らの語りを調査者である筆者に対して文字通り動機として提示することが、同時にかれら自身による自らのライフコースを構築し提示する実践でもあるということ为例証していく。そこでは従来のライフコース研究が独立変数とみなしてきたさまざまな要素は、人々が自らのライフコースに

意味とそして軌道としての体裁を与える際に用いられる言説的資源としてとりあつかわれることになる。

### 3-2 方法と対象

筆者は2013年よりZでの調査を実施している。調査方法はインテンシブなインタビューを主たるものとしながら参与観察、さらに関係文書の収集である。インタビューについては、現在の生産者20名のうち13名の移住生産者すべてを対象として調査を実施している。また、Uターンによる生産者2名のうち1名と、残るZ出身の生産者5名のうち1名についても調査を実施している。加えて、木工を所管しているZの関係者3名に調査を実施している。調査は現在も継続中であり、未調査の生産者やZの関係者に加えて、すでに引退している生産者への調査を計画している。また、すでに調査を終えた移住生産者についても現地を訪れた際の訪問を継続するとともに、その後の経過を把握するためのインタビューを計画している。

2013年度には7回、2014年度には9回、2015年度には5回、現地を訪れその都度インタビューの依頼を行いつつアポイント済みの対象者に対する調査を実施してきた。現地には短いときで1日、長いときには1週間程度滞在し、インタビューに加えて、Zと人々の暮らしぶりについての参与観察を実施してきた。とりわけ地域をあげてのとりくみである祭りや木工の30周年のイベント等については、自らも参加しつつその様子を観察し記録してきた。

インタビューは半構造化面接法による。移住生産者へのインタビューでは、移住動機、移住前の職業、家族関係、人間関係、移住後の研修の様子や研修中の生活、研修終了後の仕事へのとりくみ、移住後の家族関係、Zでの人間関係、将来の展望といった項目を聞き取ったが、対象者に生活史を自由に語ってもらうことを基本的な方針とした。Uターンを含む地元出身の生産者に対しては、木工を生業とするにいたった経緯を中心とした生活史の聞き取りを行った。インタビューに要した時間はおおむね2時間である<sup>(4)</sup>。Z関係者へのインタビューでも半構造化面接法を用いた。そこでは、おおむね1時間をかけて、自身が関わりを持った時期のZの木工と研修制度、そして研修生について具体的なエピソードとともに語っていただいた。いずれも承諾を得て録音しその後録音記録を文書化した。参与観察については、常時野帳を携帯し筆記により記録した後にフィールドノーツとしてまとめている。収集した関係文書については、現物を収集することに加えて、Z図書館などに所蔵されている文書については、閲覧しながらテキストファイルに転記することで記録としてとりまとめフィールドノーツに組み込んでいる。次節からはこれらのマテリアルを本研究におけるデータと位置づけ適宜引用および参照しつつ分析を行う。

本論文において分析の対象とするのは13名の移住生産者であるが、コンフィデンシャリティを担保するという倫理的配慮から、かれら一人一人のライフコースのあり方を個別にとりあげることはしない。13名の語り全体を対象として、ある程度一般化したやり方でかれらのライフコースのあり方を検討していく<sup>(5)</sup>。また関連施設の名称等についても、またここまでとくに断りな

くZと表記してきた地名等についても同様の配慮から匿名化をしている。本研究はインタビューという相互行為場面において動機として語りを提示するというやりとりが、同時にそれを通じてライフコースを言説的に構築するプロセスでもあるということを示していくものである。本研究の主題や目的に照らす限り、語りを個別にとりあつかわないという方針は、分析を通じて引き出される知見の意義を減じるものとはならないはずである。

## 4 移住生産者と「動機の語彙」

### 4-1 移住生産者とはどのような人々であるのか

ここでは13名の移住生産者についてまずはその全体像を確認していく。

利用した研修制度に関しては、第1期が5名、第2期が7名、第3期が1名である。このうち第2期の2名と第3期の1名が女性である。移住時の年齢は平均で36.9歳（最年少25歳、最年長52歳）であるが、研修制度ごとに見ていくと、年齢制限のなかった第1期が30.2歳、30歳以上55歳以下という年齢制限が設けられた第2期が42.0歳、年齢制限が45歳以下となった第3期は1名であるが35歳である。第1期については40代で移住した最年長者を除く4名は、いずれも20代の中頃から後半にかけて移住してきた者たちである。また第2期については40代前半の者が4名ともっとも多く、次いで30代が2名、50代が1名である。このように、1990年代までに移住した者においては、最年長者を除いて、20代という人生の比較的早いタイミングでの移住そして研修受講という出来事が経験されているのに対して、2000年代以降の第2期以降に移住した者においては早くても30代前半、中心的には40代というタイミングでそれらが経験されている。

移住前の職業については民間企業に勤めていた者が10名ともっとも多く、そのうち2名は転職も経験している。残る3名はいずれも20代後半から30代前半のタイミングで移住をした者たちであるが、定まった生業を有していたわけではなくアルバイトなどを含まさまざま労働に従事してきた者たちである<sup>(6)</sup>。民間企業に勤務していた10名のうち、第1期の研修生として20代での移住を経験した3名については前職の在職期間が10年に満たず比較的短いことが特徴といえるのに対して、第1期の最年長の1名と第2期の30代後半以降に移住した者たち6名は、いずれも前職の在職期間がおおむね20年から30年と比較的長く、一定の職業キャリアの形成を果たしたうえでそれに代わる第二の仕事として木工を選択した者たちである。また、移住前に定まった生業を有していたわけではない者3名についていえば、かれらはZへの移住によって自らの生業を獲得した者たちといえる。

移住時の世帯構成については、単独世帯が6ケースともっとも多く、次いで夫婦のみ世帯と夫婦と子ども世帯がそれぞれ3ケース、そして単親世帯が1ケースである。単身で移住した6名のうち男性4名はいずれも第1期の研修生として1990年代に20代というタイミングで移住を経

験している。すべての者がその後に結婚を経験し、調査時点では3名は配偶者と夫婦のみで、また1名については配偶者と子どもとともに家族を形成し生活を営んでいる。2名の女性はいずれも第2期の研修生であり、2000年代に入って30代で移住し、現在も単身で暮らしている。配偶者と二人で移住してきた3名の男性はいずれも第2期の研修生であり、そのうち2名は40代で、1名は50代で移住を経験し現在も夫婦のみで暮らしている。配偶者と子どもとともに移住してきた3名の男性はいずれも2000年前後に40代で移住を経験した者たちであるが、1名は第1期の最後の研修生であり、残る2名は第2期の研修生である。そのうちの1名については調査時点でも世帯構成に変化はないが、残る2名のうち1名については、子どもの一人が進学のため離家している。またもう1名については、配偶者と離別し単親世帯を形成した後に子どもの離家によって調査時点では単身で暮らしている。配偶者と離別後に子どもとともに移住してきた1名の女性は、第3期の研修を経て数年前より独立した工房を構える生産者であり、調査時点でも世帯構成に変化はない。

移住時から2016年現在までの期間、すなわちこれまでの定住期間は、第1期の研修生については20代で移住し研修と独立を経てすでに20年以上にわたってZでの生活を続けている者が4名（平均22.0年、最長24年、最短21年）、第3期の研修生についてはまだ5年と短い、それ以外の者たち8名はいずれも10年以上にわたってZでの生活を続けている（平均14.1年、最長18年、最短11年）。

#### 4-2 動機の語彙としての「木工」「田舎」

13名の移住生産者のうちでZの木工をもともと知っていたという者は少なく、もともと「ファン」であり自らもいくつかの器を購入し自宅で使用してきたという者と、たまたま雑貨店で現物を見て興味をもったという者の2名のみである。また、移住前に木工の経験を有していたという者は3名おり、そのうちの2名は趣味として、残る1名は移住前の勤務先を退職後に職業訓練校にて木工技術を1年間学ぶという機会を持っている。それ以外の10名に関しては、木工に関心を持っていたという者や、木工以外の手仕事に携わっていたという経験を持つ者、また木工品製作にも求められるデザインに関わる仕事に就いていた者などはいるものの未経験者といってよい。かれらはどのような理由によって自らにゆかりのあるわけではないZに移住し木工生産者となったのであろうか。ここでは移住にまつわるかれらの語りの中から典型的とみなしうるような「動機の語彙」（Mills 1940=1971）を事例とともにとりあげる。はじめにとりあげるのは「木工」である。

40代で移住し第2期の研修を受けた2名の対象者は、かれらの移住が木工の仕事に就くことを目的としたものであることを語っている。

【事例1】木工がやっぱりやりたいっていうのが一番にあって。ただ、仕事としてやっぱ、

できなきゃ意味がないんで。そのときに募集をしてるところが、一番なんか、しっかりしてそうという怒られちゃうかもしれないですけど、そんな感じのところはZの研修制度だったんですね。2年間研修を受けたらそのあとは独立して仕事もできるし、木工センターで販売もできるということだったんで。で、他の地域でもそういう募集あるんじゃないかっていう話聞いてたりとあってしてたんですけど、やっぱり北海道にも住んでみたいって、若干ありましたんで。だからやっぱりこっちに来ることになりましたね。

ここでは研修を経て独立し生産者として木工を生業とすることができる、そのことが何よりも重要であったと語られている。それゆえにこの事例ではZ以外の地域への移住の可能性も考慮したことが述べられている。もう一人の対象者も同様のことを語っている。

[事例2] 最初は、農業とか、そういうの興味あっていろいろ調べたりしてたんですけど、そのうち木のほうに興味が移って行って、木っていても、何やるか、林業とかもあるもんだし。会社を辞めて、それでいろいろ、それも木工とか、そういうのもちょっと興味出てきたんですかね。そういう続きでずっと、だんだんだんだん移って行って。で結局、会社を辞めたあと、職業訓練校ですね。そこ行って、その木工を1年勉強して。その1年行ってる間だったと思うんですけど、Zでこういうことやってるっていうのを知って。最初は雑誌がなんかで見たんですかね、きっかけは。で、ネットとかで調べたら研修制度みたいなのがあるって。で、ほんとに1回、こっちのほう実際、見に来たんですね。いいところだなっていうので決めたんですけど。

この対象者は、それまでの民間企業勤めから農業や林業への転職の可能性を探るうちに木工への関心を強め、職業訓練校で学んでいる時にZのとりくみを知ることになる。いずれの事例においても、本人の木工を生業としたいという意志や希望が移住を選択する主たる動機として示されているが、他の地域ではなくZという地域が選ばれているということにも注意を向けておきたい。[事例1]についていえば、「北海道にも住んでみたい」が、[事例2]についていえば、実際にZを訪れ「いいところだな」と思えたことが、Zの研修制度を利用して木工を生業とするための移住動機と関連づけられて語られている。

移住動機としてZの木工に関わる語りが示されたケースは5つあり、[事例1]および[事例2]の対象者に加えて、移住前からZの木工を知っていたという2名についてもZの木工を生業とするために移住してきたと語られている。その一方で、つづいてとりあげる事例においては木工への魅力が語られるものの、移住当初から木工を生業としてZで生活していく意志があったわけではなかったことが語られている。

〔事例3〕 ぼくが来たのが26歳の年なんですけれども。正直言って、その時はここに定住して家族を持ってとかっていうことは考えてなかったですね。ただ木工が好きで。技術が学べるということと。あと、ぼくらの時代って研修生への奨励金というのがありまして。生活を保障しますということだったんですね。それで技術を学べるということなので、これはいいなど。その程度の思いで、まず来て始めたんですよ。それでやっていく中で地域との関わりもできてきて結婚もして。そのうちに知らず知らずのうちに、もうここが地元っていう感覚になっていたというのが正直なところですね。だから基本的に「どうしても」っていう明確な思いっていつか。そういうのはあったわけではなかったです。

第1期の研修を受けたこの対象者は、研修中に支給されるZからの経済的援助が魅力のひとつであったことを語っている。経済的に保障された環境の下で、好きな木工の「技術が学べる」Zのことを知り、かれは20代で移住を決断する。技術を身につけ独立し、やがて配偶者もみつけ家族を形成し、地域との関わりを深める中で「知らず知らずのうちに、もうここが地元っていう感覚になっていた」のだという。

1980年代からZが木工を地域産品化しその生産者を育成する制度を整備してきたことをふまえるならば、そのような地域への自らの移住が「木工」やそれを仕事とすることを目的とするものとして語られることはきわめて自然なことであろう。そのような意味において「木工」は移住をめぐる典型的な動機の語彙とみなしうる。その一方で、例えばある対象者が「木工じゃなくてもなんでもよかった」というように、木工はあくまで手段であり、移住の目的は別のところにあると語る者もいる。その際、〔事例1〕でも言及される「北海道での暮らし」や、その別バージョンともいえる「田舎での暮らし」への憧れ、またやその裏返しでもある「都会での暮らし」に対するネガティブな評価がしばしば語られる。たとえば「夏は釣りをして、冬はハンティングをしてっていうようなアウトドアの生活が好きだった」というある対象者は、そうした趣味が高じて「田舎暮らしっていうのも悪くはない」と考えるようになり、Iターンについて調べるようになったという。

〔事例4〕 それを調べ始めたんですよ。そしたら南が良いか北が良いかっていうこともあったんで、どっちかっていうとぼくは寒い所が好きなんで、北海道でもよいんじゃないっていうことを思い始めて。それでIターンの方の雑誌を調べてみると、けっこう移住先を探している方がいらっしやるんで、結構あるんだなと。結婚してたんで妻に相談して。もう仕事もね、どうなるかわからないし、おれも趣味を突き詰めたいし、お前どうする？って妻に聞いたんですよ。そしたら、私は別に構わないって言うんですよ。北海道でもね。

第2期の研修生として2000年代に配偶者と二人で移住してきたこの対象者は、この事例につ

づく箇所、事前に夫婦で北海道を何度か訪れ「一番寒い時に来て、これならなんとかいけるよねって話」をした上で、本格的に移住先を探しZの木工を知ることになったと語っている。この〔事例8〕を含めて、木工を主たる目的としたわけではないと語る8名の移住生産者は、そのほとんどが「田舎」での暮らしや「北海道」での暮らしという動機の語彙を用いて、移住までの経緯を語っている。

## 5 動機を語ることを通じたライフコースの構築

このように対象者の語りにおいては簡明でわかりやすい動機の語彙（「木工」「田舎」）の存在が確認できるが、移住をめぐるかれらの語りの形式的な側面に着目するならば、多くの対象者は、明快で簡潔な回答を即座に示しているわけではない。かれらは「なぜZに移住して生産者になったのか」という筆者の問いに対して、過去を振り返り、自らの移住という選択に関連づけられるいくつかのエピソードや背景的な出来事について言及しつつ、新しい土地や仕事へのチャレンジという意味を持つ自らのかつての選択が理にかなったものであったことを筆者に対して語っている。言い方を換えると、多くの対象者にとってZへの移住は、さまざまな要因が複合的に重なり合うなかで可能となった選択として語られている。対象者たちにとって、そうしたさまざまな要因は、かつての自らの選択を現在の自分自身にとって理にかなったものとして意味づけるための言説的資源であるとともに、それらを参照しながら動機を語ることは、インタビューという相互行為場面において、自らのかつての選択を聞き手である筆者に対して理解可能なものとして示す記述実践としてみなすことができる。

ここでは13名の語りからそれらを移住という選択についての動機をめぐる語りとして成立させていくいくつかのテーマを析出し検討を加えていく。前節では典型的な動機の語彙をとりあげたが、そうした動機の語彙は複数のテーマと関連づけられながら、移住をめぐる物語を形成しているといってもよい（井上 1997）。移住者のライフコースのあり方に照準する本研究がここで着目するのは、「職業キャリア」「個人時間（加齢）」「歴史時間」「家族キャリア」という4つのテーマである。

「職業キャリア」をめぐる語り、とりわけ前職をめぐる語りは、しばしば移住という選択について語るうえでの背景としてテーマ化される。たとえば、以下の事例は先にとりあげた〔事例2〕の前段にあたるものである。

〔事例5〕自分でもはっきり、これっていうのがあったわけではなくて、なんかいつの間にかここまで来ちゃったんだっていう。もともと関西のほうで会社に勤めてまして、15年近く働いたのかな。10年過ぎたあたりから、このままでいいのかなあっていうことがあって。だからなんか、なんか会社を、辞めてっていうか、会社自体、別に居心地悪いとかそういうのぜ

んぜんなかったんですけど、ちょっと違う方向に行きたいなっていうのがあって。

この対象者は大学を卒業後に民間企業に就職し、「15年近く」その企業に勤め、その後退職し職業訓練校で学ぶことになるのだが、「このままでいいのかなあ」という感情や「ちょっと違う方向に行きたいな」という願望を、就職して「10年過ぎたあたりから」もつようになったことが、これにつづく〔事例2〕で語られる木工への興味の背景として語られている。また、ここでは直接的に自らの年齢についての言及がなされているわけではないが、「職業キャリア」に関連づけられた「個人時間」の経過とタイミングがテーマ化されているともいえる。13名の対象者のうち移住という選択の背景として「職業キャリア」とりわけ前職への言及が明確に示されなかったのは2名のみであり、ほとんどの対象者が筆者のうながしによらずともそれをテーマ化している。かれらにとってのZへの移住が「職業キャリア」上の移行という意味を強くともなうものであることが推察される。またこの「職業キャリア」というテーマは、しばしば自らの「個人時間」と「歴史時間」それぞれにおけるタイミングと明確に関連づけられながら語られる。少し長いが、2000年代に移住し第2期の研修を受けたある対象者の語りをとりあげる。

〔事例6〕 うん。そうですね。どうして、どうしてだったのかなあ。

あの、もともとわたしサラリーマンだったんですけど、どういったらいいのかなあ。疲れたというか、嫌になったってような部分もあれば、こういうことをずっとやってて、いいんだらうかって思うようになったって部分もあるし、まあ、それがあから前の、なんか嫌になった、嫌にはなってなかったんですけど、すごいたのしかったんですけど、あの、ちょっと考えなくっちゃいけないのかなっていう気分に、なったのが最初なのかなあ。

まあ、それと会社ってというか、時代的にもリストラがさかんに行われてたりとかってというような時代ってというか時期だったので、まあ早期退社を募集したりとか、世の中全般に行われて、そういうのも重なって、じゃここは少し何か違うことでも、始めようかってというようなのはじめにあったんですよ。

で、えっと、歳もまあまあ、昔からなんか会社辞めて違うことをとかって思って、まあそんなに現実的なものじゃなくても思ったりしたことがあって、時々そういうのが、やっぱり、同じことじゃないんですけど、たのしい中にもやっぱり辛いこともあるし、あの時々こうちょっと、芽が出るというかね、ひょこひょこそういう考えがでてきたりしてたんですけど。うんと、ちょうど40歳ぐらいだったんですね。でまあちょっと、本当に考えましようというような感じになったんですよ。

筆者の質問に対して、この対象者はまず「サラリーマンだった」前職について説明した上で、あるときから「ちょっと考えなくっちゃいけないのかなっていう気分に」なったと語っている。「会

社を辞めて違うこと」に挑戦することについて漠然と考えるようになったことが語られているのであるが、そうした「職業キャリア」をめぐる経験は、ひとつには当時の「リストラ」「早期退社」などといった時代状況という「歴史時間」に関連づけられるとともに、さらにはそれが「ちょうど40歳ぐらいだったんですね」という「個人時間」上のタイミングに関連づけられることで、理解可能性を高めているとみなしうる。さらにこの対象者は、この事例とは別のところで、このようなサラリーマンとは異なるより自由な仕事への願望と「田舎」での暮らしという希望がちょうど重なるなかで、田舎暮らしに関する情報誌などを「暇があれば見てた」ところZの木工の研修制度を知ったと語っている。

このように、移住という選択をめぐる動機は複数のテーマに関連づけられることを通して一連の物語を形成しているとみなすことができる。この対象者についていえば、「職業キャリア」における移行は「個人時間」における中年期というタイミングや「歴史時間」における時代効果、さらには別の箇所でも「それも大きかったんじゃないかと」と語られる子どもがいなかったことという「家族キャリア」とも関連づけられることで可能になった経験として語られている。

「職業キャリア」におけるかれらの移行をめぐるのは、「歴史時間」についていえば1990年代のバブル崩壊後の経済状況に関連する出来事への関連づけが、また「個人時間」についてはとりわけ30代後半以降に移住を経験した者たちにおいては、中年期というタイミングがかれの動機を理解する上で重要な言説的資源になっている。

20代で第1期の研修生となった4人の対象者の語りにおいても「個人時間」はテーマ化されるが、中年期の悩みといった観点からではもちろんなく、むしろ「若さ」が語られる。ある対象者は「その頃まだ27だか26だから、若かったのもあって、意外にサッと決めちゃいましたね」と語る。北海道にもZにも縁もゆかりもないというこの対象者は、「田舎」での暮らしへの憧れがあったわけでもなく、たまたま手にした雑誌に掲載されていた研修生募集の記事を見て「木工は趣味というか、そういうのではやっていたので、なんかそういうので自営業というか、一人でやっていけるかなあという気がして、もう結構ポンッと「来ちゃえ」って感じで」決断したと語る。いずれも単身で移住してきた4人の語りにおいては、1990年代という「歴史時間」のテーマ化のされ方に関しては、30代後半以降に移住してきた者たちと大きな違いはないが、前職の比較的短い「職業キャリア」と「個人時間」さらには「家族キャリア」に関して、かれらとは異なる語られ方がなされていることが指摘できる。

最後に「木工」を手段として「田舎」での暮らしを求めて移住してきたという対象者の事例をやや詳しくとりあげる。40代で配偶者と二人の子どもとともに移住してきた者である。

【事例7】 社宅は借り上げ社宅だったんですけれども、郊外の方で。そこから通ってたんですよ。自然が残ってて、子どもがまだよちよち歩きの頃だったんで、まあいいなと思って。そこで3年過ごしてるとやっぱし、ちょっとこんな環境で子育てできないなっていうのがひとつ。

それと、仕事が、本社が関西にあって、出張ばかりで。多いときは月に20日ぐらい。家にいることもできない。当時2歳くらいだった娘が出張から帰ってきたら母親の陰に隠れちゃうんですよ。知らないおっさんがやってきたと。(中略) そういうこともあって、それで、田舎暮らしをしたいなというのは私も嫁も同じような考え方をしていたので、田舎暮らしの雑誌をあの時は買って一生懸命読んでたんですよ。そうすると、たまたま研修制度があったと。それ以前にも個人的には探してたんですけど、田舎はいくらでも行けるんですけど仕事がないんですよ。

筆者とのやりとりにおいてこの対象者が最初に語ったのは「都会暮らしがいやだった」ということであり、つづいて生まれ育った土地と高度経済成長期という時代状況が語られる。大学時代にオイルショックを経験し卒業時には就職難であったこと、さらに将来的には「独立開業」を考えつつも、関東に職を見つけ移住前の「職業キャリア」がテーマ化され語られる。[事例7]はそれにつづく語りである。この対象者は「田舎」での暮らしを求めて移住してきたと語っているが、そうした動機が「職業キャリア」とさらにそれに関連づけられた「家族キャリア」というテーマの下で語られている。出張が多く家族と過ごす時間が少なかった当時の状況をふりかえりつつ、さらには郊外とはいえ都市部での暮らしが子育てにとってよい影響を及ぼさないだろうという考えの下で、「田舎」での暮らしの可能性を夫婦で模索する中でZの木工を知り、子どもが小さいうちに移住を決断したのだという。以下の事例は木工についての語りを含むこのやりとりのつづく箇所からのものである。

[事例8] 独立開業が田舎でできるんだと。もってこいじゃないかと。別に木工品を作りたいくて来たわけじゃなくて、これはあくまで生活手段であると。ちょっと他の方とは違うと思う。仕事はほかのものでもよかったんです。ただもう、雇われるというのは年齢的にも当然無理、もう45でしたからね。あともうひとつはキャンプ場をやろうかなと、オートキャンプがちょうどはやりの頃で。狙ってたのが関西と関東の間だったら山梨とか長野とか、その辺がいいかなと思って結構見たんですけど。

木工は「あくまで生活手段」と語られる。さらには「個人時間」上のタイミングとの関わりで「雇われるというのは年齢的にも当然無理」であり、Z以外も含めて「独立開業」が可能な田舎での仕事を探していたことが語られている。「オートキャンプ」をめぐる語りは当時の時代状況への言及ともみとれる。このように、「田舎」という動機の語彙を中心としつつも、「職業キャリア」「家族キャリア」「個人時間」「歴史時間」といったテーマが相互に関連づけられながら、Zへの移住という選択が一連の物語として語られている。

いくつかの事例をとりあげながら例証してきたが、こうした分析から導くことのできる知見は、

インタビューという相互行為場面において、対象者たちが移住という選択の動機を文字通り動機として語ることが、同時にかれらのライフコースを言説的資源を用いて構築する実践でもあるという点にある。「木工」や「田舎」といった典型的な動機の語彙が「職業キャリア」や「家族キャリア」、「個人時間」や「歴史時間」というテーマの下での語りに関連づけられることで移住という選択についての理解可能性を高めるとともに、そうした出来事と経験をしかるべき位置に組み込んだかれらのライフコースが語りを通じて構築されているのである。

## 6 「ローカルな文化」の発見：むすびにかえて

本論文ではZの木工おける移住生産者の語りを題材としながら、語ることを通じたかれらのライフコースの構築過程を分析してきた。インタビュー調査においては、移住前の生活状況や人間関係から移住後のZでの生活状況や新旧の人間関係のあり方までを含めて現在までの生活史を聞き取っているが、本論文ではかれらの移住というライフイベントに着目したことにより、Zに移住し木工という新たな生業を獲得するまでのプロセスに限定して分析を行ってきた。かれらがZという地域社会の一員として形成してきたその後のライフコースのあり方を検討することが次の課題である。そのための予備的考察をかねて最後の事例をとりあげたい。すでに生産者として10年のキャリアを持つ対象者に、この間にどのようにして新しい地域に溶け込んでいったのか移住から定住までのプロセスについて問うた際の語りである。

【事例9】 いやあ、なじんできましたねえ。やっぱりねえ、はじめはずいぶんつつかれましたよね。ただ、ただ入ってきて、木工をやってるっていうだけでも、昔のイメージがあるんですよ。Zのお金をもらって、Zの人からいわせると、ぼくが感じた印象だと、Zの募集で木工を好きに、好きで木工をやりきって、なおかつZからお金もらって、遊び半分で器つくってるんだべっていう人が、今でもいるんです。

このとき筆者はすでに3人の移住生産者へのインタビューを終えており、また調査にあたっては、Zという地域やそこでの地域産品としての木工品製作、さらに研修制度等の概要についても、関係者へのインタビューや文書資料などを通じてある程度は把握しているつもりであった。しかしながら、このやりとりにおいて対象者の説明をつかの間ではあるが把握し損ねる。

外部からの移住者が時間をかけて新しい地域に溶け込んでいくというプロセスは、それ自体が地域社会のあり方を考えるうえでも、またたとえば「よそ者」(Schutz 1964=1997; Simmel 1908=1994)としての移住者をめぐる問題を考えるうえでも、重要な主題となりうるものであろう。筆者は苦労話やそれを克服するエピソードなどを聞くことを期待していた。実際、[事例9]における「なじんできましたねえ」や「やっぱりねえ、はじめはずいぶんつつかれましたよね」

という発言は、その後のさまざまな苦労話の前段と理解することができるものであるし、それにつづけてその苦労話の内実が語られていくことになる。

インタビューのやりとりのなかで、筆者がこの語りの意味を理解し損ねていることに気づいたのは、その直後の語り「入ってきて、木工をやってるっていうだけでも、昔のイメージがあるんですよ」のくだりのあたりである。第2節において整理したように、Zにおける研修制度は現在までに何度かの改変を経ており、この対象者は第2期の研修制度を利用して生産者となった者の一人である。ここで示される「昔のイメージ」とは、第1期の研修制度とその研修生をめぐって形成されたZにおける木工のとりくみに対する地元の人びとのイメージである。第1期においては、研修生は日々の生活をまかなうに十分な援助金が支給され、そうしたなかで「好きで木工をやりきって、なおかつZからお金もらって、遊び半分で器つくってる」という認識が、一部の人々にとってのものとしてであれ形成されていたということである。

つまり〔事例9〕の語りは、Zにおける研修制度のあり方とそれにとまなう研修生に対する地域の人びとの評価の仕方、さらにいえばそれらの時間的な変遷という「ローカルな文化」（Gubrium & Holstein 2009）を参照することを抜きにしてはその意味を適切には理解することができない。換言すると、この語りは、その理解可能性を担保する文脈あるは背景的なテーマである、Zにおける木工とその生産者および研修制度をめぐる「ローカルな文化」に埋め込まれたものとみなしうる。語りそれ自身が志向するこうした文脈のあり方に着目しながら、語りの理解可能性を担保している「ローカルな文化」を探ること、そしてそれを参照しながら構築される移住後のかれらのライフコースのあり方を検討することを次なる課題としたい<sup>(7)</sup>。

#### 注

- (1) Zの職員組合が1991年にまとめた『報告書』では木工が地域づくりに関連づけられて論じられているのであるが、初期に開設されたもののその後閉鎖した工房の事例が2つ紹介されている。いずれも生業との両立という副業としての生産の持続の難しさが指摘されている。
- (2) その他に1名のUターン者がいる。
- (3) そのうち2名は現在では廃業している。
- (4) 対象者に急な用事ができて1時間ほどで切り上げたケースが2件あった。
- (5) いずれのケースにおいても、研究の目的を説明するとともに学術的な目的での情報の利用について許諾を得ている。
- (6) 厳密にいうと、うち2名は短期間であるが民間企業勤務経験を有する。
- (7) とりわけ、研修制度の変遷という観点からZにおけるローカルな時間の経過とタイミングを、かれらが語りを通じて構築するライフコースのあり方と関わらせて検討することが課題である。本論文でとりあげた〔事例3〕などにおいても「はくらの時代って研修生への奨励金というのがありまして。生活を保障しますということだったんですね」と語られていたように、そうしたローカルな時間におけるタイミングがテーマ化されていたともいえるだろう。

本論文は、札幌学院大学研究促進奨励金による研究課題「人口減少と地域」SGU-AS13-205008-09、「移住者のライフコースと物語」AGU-AS14-205008-04、「移住と再生産」SGU-AS15-205008-04の成果の一部である。

## 文 献

- Giele, J. Z. and Elder, G. H., 1998, "Life Course Research: Development of a Field," Giele, J. Z. and Elder, G. H. eds., *Methods of Life Course Research: Qualitative and Quantitative Approaches*, Sage. (=2003, 正岡寛司・藤見純子訳「ライフコース研究:ひとつの分野の発展」『ライフコース研究の方法:質的ならびに量的アプローチ』明石書店:43-77.)
- Gubrium, J. F. and Holstein, J. A., 2009, *Analyzing Narrative Reality*, Sage.
- Holstein, J. A. and Gubrium, J. F., 2000, *Constructing the Life Course (2nd edition)*, General Hall, Inc.
- 井上俊, 1997, 「動機と物語」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『現代社会の社会学』岩波書店:19-46.
- Mills, C W, 1940=1963, "Situated Actions and Vocabularies of Motive," I . L. Horowitz ed., *Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Wright Mills*, Oxford, Oxford University Press, 439-68. (=1971, 田中義久訳「状況化された行為と動機の語彙」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房:344-55.)
- Schutz, A., 1964, *Collected Papers II, Studies in Social Theory*, edited and introduced by A. Brodersen, M. Nijhoff, The Hague. (=1997, 桜井厚訳『現象学的社会学の応用』御茶の水書房.)
- 嶋崎尚子, 2008, 『ライフコースの社会学』学文社.
- Simmel, G., 1908, *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Duncker & Humblot. (=1994, 居安正訳『社会学:社会化の諸形式についての研究(下)』白水社.)
- Spector, M and Kitsuse, J. I., 1977 *Constructing Social Problems*, Cummings. (=1990, 鮎川潤・森俊太・村上直之・中河伸俊訳『社会問題の構築:ラベリング理論をこえて』マルジュ社.)
- 鶴田幸恵・小宮友根, 2007, 「人びとの人生を記述する:『相互行為としてのインタビュー』について」『ソシオロジ』52(1), 21-36.

Rural Migration and Life Course: Life Course Construction through Talking about Motivation

KIDO Isao

Abstract

Based on a constructionist perspective, this paper examines the life course of people who have experienced migration from an urban to a rural area. Focused on their talking about the motivation for migration, their narratives gathered through interview are analyzed. The author argues that, in the setting of the interview as an interactional process, their narratives about migration are presented literally as motivation according to reference to a number of different contexts. Focusing on the four contexts of vocational career, personal time, historical time, and family career, this paper illustrates that the practice of talking about motivation is also a practice, discursively, of life course construction. In addition, as a preliminary consideration of life course construction after migration, it is shown that their experiences are talked of by reference to "local culture," as shared by the people of the area.

Keywords : Life Course, Motivation, Constructionism

（きど いさお 札幌学院大学人文学部人間科学科准教授 家族社会学・質的研究法）